

神道系大学における

ボランティアコーディネーターの葛藤

板井正斉

本発表の問題の所在は、タイトルに集約させている。神道系大学でボランティアコーディネーターを務める発表者は、発災直後から様々な支援の形を学生と模索し、「伊勢からできること」をコンセプトにやれることから積極的に取り組んできた。その中で、発表者には一つの思惑があった。これまで本学のボランティアルームは、社会福祉学部のある名張学舎で展開してきた。それがこの四月より伊勢学舎へと統合されたのを機会に、神社系のボランティアと、一般のボランティアを融合させたような本学独自の災害支援のあり方に挑戦できるのではないかという思いだった。

続々と入ってくる情報を、有志の学生と教職員によるプラットフォーム(災害ボランティア情報交換会)へ流しながら、生じた反応をうまく実現につなげていく我々なりのコーディネーター手法は、ある程度有効に機能し、いくつかの小さくも意味のある支援につながれた。

ところが前述の思惑は、さっぱりうまくいかなかった。そもそもプラットフォームに関わってくる学生の所属は、当初から教育系・福祉系が多く、教育支援や、写真洗浄、募金活動、物資支援、物産販売等、いわゆる一般ボランティアへの興味が高かった。

ある日の集まりで、発表者からさりげなく「本学に縁のある神社界でも、様々な支援の動きがあるので、情報をメーリングリストへ流すのはどうだろう?」と提案したところ、「その情報は私たちの考える支援には特に必要ない」と遠慮しながらもはつきりと断られた。

その一方で、「宗教者災害救援マップ」で被災地神社の情報を入力するボランティアは、神道系の学生を対象に募集したところ、説明会には約二〇名が参加してくれた。つまり被災地への支援に興味がないわけではない。むしろその姿勢は積極的でさえあったし、その中で主要な役割を担ってくれた学生の一人は、ボランティアルームでも活躍している。

それでも融合しないのはなぜだろうか。何を持って融合とするのかも検討する余地はあるものの、上述の体験は発表者にとって、現代社会における〈一般ボランティア〉と〈宗教ボランティア〉の関係性に、支援を求めている対象との距離の課題も絡めながら、支援する者の意識が凝縮されているように感じる。

そこで本発表では、被災地から離れた神道系地方小規模大学としてのボランティアルームを中心とした支援活動の概要を紹介した。その上で、被災地から離れた小規模神社の神職で興味深い支援活動を継続している事例を取り上げ、上述の問題意識を比較考察してみた。具体的には神職が日々発信するブログを分析対象として、そこに書かれてあるテキストから被災地への関わりの意識分析を試みた。

その結果、対象ブログでは「被災地」と「神社」「支援」が

継続して使われており、「地域」の「神社」から「被災地」への「支援」という発信者の強い思いをうかがえた。また必ずしも組織的で華々しい活動ではないが、小さくささやかに、地域神社と一神職が、被災地の人々とながっていた。その上で本学の活動と比べると、組織的な活動ではないが、学生個人の思いを地域の多様な社会資源とつなげること、かえって地域を意識した活動になっていることを推測できる。目に見えた神道系大学としての支援とは言えないが、コーディネーターとして、地域への意識の向けさせ方によっては「神道系らしい」興味深い活動へとつなげることができるかもしれない。

パネルの主旨とまとめ

稲場 圭 信

本パネルは、東日本大震災という未曾有の大災害における、生きた宗教の姿を浮き彫りにするひとつの試みである。東日本大震災に対する宗教者・宗教団体の救援活動、支援活動を概観し、宗教者、そして宗教研究者の社会的な関わりを検討した。

稲場圭信の報告は、インターネット上に開設した「宗教者災害救援ネットワーク」を通して、東日本大震災における宗教の救援活動・応答を概観した。そして、被災者がこれから生きていく、その生を丸ごとケアする宗教者たちの取り組みや、被災地で避難者を受け入れて救援活動をした寺社宗教施設の宗教者への聞き取り調査の報告を行った。さらに、黒崎浩行を中心に

システム構築された「宗教者災害救援マップ」や島蘭進を代表とする「宗教者災害支援連絡会」の活動と研究者の関わりを紹介し、未曾有の大災害に研究者もその関わりが問われていることを指摘した。

榎本香織は、震災時に活用された「ソーシャルメディア(mixi, Twitter, Facebook)」が宗教者(団体)の中でいかに利用されたかを俯瞰し、それぞれの活動状況を比較した。mixiはその匿名性が、内面的対話が促進された一方で現実的な物資提供においては弊害の可能性もあること、Twitterはハッシュタグの特性を用い、多くの情報の中から宗教と支援に関する情報を収集・提供する事で後方支援的活動が可能なこと、Facebookにおいては特に宗教団体の支援活動の可視化が、教団内の連携強化や活動理解の深化、そして寸断された地縁回復の一助となりうる可能性を提示した。

弓山達也は、宗教立大学における円滑な被災地支援に、建学の精神や設立教団との連携がいかに寄与するかを検討するために、都内の宗教立大学二校(國學院・駒澤・上智・聖心女子・創価・大正・東洋英和女学院・武蔵野・明治学院・立教・立正)の取組を検討。建学の精神(理念)が、被災地支援の直接の理念になるというより、支援の実践を通じて理念に内実を与えているといった方向性を確認し、設立教団との連携や宗教行事はその下支えとなっていることを指摘した。

板井正斉は、被災地から離れた神道系地方小規模大学のボランティアルームを中心とした支援活動と、同様に被災地から離れた小規模神社の神職による支援活動から、被災地への関わり